34　そのとたんに兵十が、向うから、
「うわア、ぬすと狐め」
と、どなりました。　35　ごんは、びっくりしてとびあがりました。
ごんの首にまきついたままはなれません。　37　ごんはそのまま横っとびにとび出して、一しょうけんめいに、にげていきました。
36　うなぎをふりすててにげようとしましたが、うなぎは、

語彙的・文法的意味・構造

・そのとたん→うなぎがごんの首に巻きついたとたん

36
（ごんは）――うなぎを――ふりすてて――にげようとしましたが、
うなぎは、――ごんの首に――まきついたまま――はなれません。

指導の要領・留意点

・文34は兵十、文35はごん、文36はごん（省略）とうなぎ、文37はごんについて、それぞれ述べた文が、テンポが速く、たてつづけの動きなので、ていねいに読みとった上で、その表現性をとらえさせたい。

・文37は、あわをくらったごんのようすが鮮やかに描かれている。

38　ほら穴の近くの、はんの木の下でふりかえってみましたが、兵十は追っかけてはきませんでした。
39　ごんは、ほっとして、うなぎの頭をかみくだき、やっとはずして穴のそとの、草の葉の上にのせておきました。

・ふり返ってみる＝何かもくろみをもっておこなう動作を「もくろみ動詞」で表すことができます。もくろみ動詞は、第二なかどめに、たすける動詞「みる」「みせる」「おく」をくみあわせてつくります。
みる＝動詞の示す動作をためしに（こころみとして）おこなうことを表す。「みる」が独立の動詞であるか、この種のもくろみ動詞の要素であるか、文脈がなければはっきりわからないわからない場合がある。（ためしにする動作）

ほら穴の近くの
はんの木の下で
（ごんは）――ふりかえってみましたが、
兵十は――追っかけてはきませんでした。

ごんは、
ほっとして、
うなぎの頭を
かみくだき、
やっと
はずして
穴のそとの、
草の葉の上に
のせておきました。

・文38は、ならべあわせ文だが、続ける文には、主語（ごんは）が省略されている。文37の勢いがここまで続いているわけだ。榛の木まで、後ろを見ないで一目散に逃げてきたことがわかる。そして、ほらあなの近くまできて、やっとふり返るゆとりができたのだろう。おそらく、榛の木のところは、見通しもいいのだろう。
・ふり返ってみる＝ためしにする動作を表すもくろみ動詞。兵十が追っかけてくるかどうかを確かめることを内容とするふり返ってみる、という動きだ。
・追っかけては来ませんでした＝追っかけてきませんでした。「は」は、さしだし的なニュアンスを持っているように思える。追っかけてくるかな、と思っていたが、その「追っかけてくること」はなかったということだ。指定というのかもしれない。

○文39は、この場面の最後の文で、ごんの動きがたてつづけに四つある。主述を対応させて、正確にとらえておくことが、まず大切だ。今までの緊張がやっとゆるんで、ゆっくりとした気分になっているごんの姿がうかがえる。
・やっと外して＝ずいぶんめんどうをかけやがったなあ、といった気持ちがつけ加わる。「ほっとして」につづいて、安堵の気分だ。
・あなの外の草の葉の上にのせておきました＝いたずら者の小ぎつねという先入観からすれば、つじつまの合わない記述といえる。行動がていねいだ。草の葉の上に、ということは、生え繁った草の中にということではない。ていねいに草をならしたのだろうか。また、のせておく、というのも、投げ出したのではない。もくろみ動詞「あとのことを考えに入れてする動作」を用いていることを見逃せない。

・やっと＝陳述副詞　話し手の気持ちをつけ加える
・かみくだく＝かむ＋くだく
・のせておく＝もくろみ動詞の　～しておく。

このもくろみ動詞は、あとのことを考えに入れて、動作をおこなうことを表す。

雨が降りそうなので、せんたくものをとりいれておいた。
明日の朝は早いので、夜のうちに弁当を作っておきましょう。
また、とりあえずの処置としての動作を表すこともある。
夕方、ごちそうが出るので、おやつは食べないでおこう。

草の葉の上に　のせておきました。
草の葉の上に　のせました。
草の葉の中に　おきました。
草の中に　すてました。

もくろみ動詞の用法を軸に比較する。

＊　もくろみ動詞についても、その後、研究が進んでいる。「あとのことを考えて」というのは、もくろみ動詞の用法の中のひとつである。